

『アルベール・ルーセル生誕150年』

伊藤美由紀 (1200 文字)

ベルリオーズの亡くなった1869年に誕生し、ラヴェルと同じ1937年に亡くなったアルベール・ルーセルは、同時代に活躍したドビュッシー、ラヴェルの影となりがちであるが、音楽家としての活動は遅咲きであったものの、弟子には個性的な才能を発揮したサティ、ヴァレーズ等を含み、両世界大戦間の時代の重要なフランス人作曲家の一人である。

ルーセルは、幼くして両親を失い、祖父も11歳には亡くなり不幸な幼少期を過ごした。しかし、北フランスの裕福な実業家の一人息子として生まれ、祖父も市長であり、親戚からも親切にされ十分な教育を受け大切に育てられていたようである。少年時代は、音楽よりも算数を好み、海を愛し海軍兵学校に進学し、世界各地を航海する。海軍で訪れた異国の地での経験は、後の音楽にも影響を与える。長期休暇の際にルーベの音楽院院長のジュリアン・コシュールに和声を学んだのがきっかけで、彼の薦めもありパリで音楽を本格的に学ぶ決意をする。海軍を除隊し、パリでウジヌ・ジグーにピアノ、オルガン、和声法、対位法を学び始めたのは25歳であった。その後、パリのスコラ・カントルムに入学し、ヴァンサン・ダンディに師事する。パレストリーナ、バッハをモデルとして対位法に力をいれた厳格な伝統重視の教育を受ける。修了時には39歳であった。その後、母校で教鞭もとり弟子としてサティ、ヴァレーズ、マルティヌーらが含まれる。

彼の初期作品は、ダンディ、フランクの影響で形式的で保守的な作風の循環形式を好み、和声法ではドビュッシーの印象主義音楽の影響を受けていた。初期代表作は、フェアブル昆虫記からのアイデアで書かれた象徴的な作品、バレエ音楽《蜘蛛の饗宴》や古典的なダンス形式で書かれた《ピアノのための組曲》を含む。フルートとピアノの為の4つの小品からなる《フルートを吹く人たち》は、人気のあるフルート作品である。各々の小品は、ギリシャ神話の牧神、ヴェルギリウスの『牧歌』、ヒンズー教の神、クリシュナなどからタイトルがとられ、彼の同時代の4名のフルート奏者に捧げられている。《交響曲第2番》でヨーロッパ全土からアメリカまで評判を高め、クーセルヴィツキーから讃辞を送られる。その結果、ボストン交響楽団創立50周年公演(1931)の為にストラヴィンスキー、オネゲル、プロコフィエフらとともに与えられた委嘱作品として、彼の《交響曲第3番》へとつながり、初演はアメリカでも大成功をおさめた。全盛期であった60歳記念には、彼の作品によるコンサートシリーズが開催され、プーランク、オネゲルらによる彼に捧げたピアノ作品も発表された。晩年の代表作、バレエ音楽《バカスとアリアーナ》、《交響曲3番》、《交響曲4番》、《シンフォニエッタ》は、印象主義スタイルから離れ、強烈なリズム、重厚な管弦楽法、新古典主義スタイルで彼の独自の世界を構築している。痛烈な不協和音や調性の判断しにくい箇所があるものの調性は保持している。ストラヴィンスキーからの影響を受けている凝縮されたエネルギー、迫力のあるリズム、そして表現力に富んだ旋律で彼の個性を発揮している。